

グローバル・フェミニズムズ：  
女性によるアクティビズムと学問の比較事例研プロジェクト

地域：日本

話し手：八幡悦子

聞き手：吉浜美恵子

インタビュー場所：Sendai, Miyagi, Japan

日付：2021年9月28日

ミシガン大学 女性・ジェンダー学研究所

**(University of Michigan Institute for Research on Women and Gender)**

住所：1136 Lane Hall Ann Arbor, MI 48109-1290

電話：(734) 764-9537

メールアドレス：[um.gfp@umich.edu](mailto:um.gfp@umich.edu)

ホームページ：<http://www.umich.edu/~glblfem>

© Regents of the University of Michigan, 2021

## 八幡悦子

NPO 法人「ハーティ仙台」設立、現在まで代表理事を務める

(<https://www.hearty-sendai.com/>)。DV シェルターや多くの支援プログラムを運営しながら、東日本大震災の被害を受けた女性達をサポートする草の根活動を展開。助産婦として始まったキャリアを通し、30 年以上にわたり、ジェンダーに基づく暴力の根絶、性と生殖の健康、人権、非暴力のための啓発運動を継続している。よりそいホットライン (24 時間無料電話) 仙台みやぎ地域センター代表、(公益財) せんだい男女共同参画財団理事、NPO 法人チャイルドラインみやぎ理事など多数の団体の運営に貢献。

## 吉浜美恵子

ミシガン大学 社会福祉学大学院教授。社会福祉学博士。社会福祉士。性暴力の防止と女性の安全の促進を研究テーマとしている。夫 (恋人) からの暴力調査研究会の共同設立(1991 年)、日本初のドメスティック・バイオレンスの実態調査、フォーカスグループ調査を経てドメスティック・バイオレンス被害者支援のサポートグループの立ち上げと共同運営 (1998 年)、東日本大震災女性支援ネットワークの共同設立 (2011 年)、災害時の性暴力に関する初の研究調査 (<http://risetogetherjp.org/?p=4879#more-4879>)、被災した女性とともにフォトボイス・プロジェクト (<https://photovoice.home.blog/>) の実施など、日本で長年に渡りアクション・リサーチを行っている。

**Mieko Yoshihama:** えー、グローバル・フェミニズムズ・プロジェクトの一貫として、今日は日本で活動されている八幡えつこさんにインタビューします。では、今日は八幡さん、よろしくお願いします。

**Etsuko Yahata:** はい、よろしくお願いします。

**MY:** はい、それでは早速なんですけれども、八幡さんの活動について色々聞いて行きたいと思います。で、八幡さんはどのような経歴、どのようなきっかけがあって、今のご自分があると思いますか？あるいは今のご自分の仕事、活動があると思いますか。

**EY:** はい、私は看護師、助産師として総合病院に10年勤務していました。その時、離婚を体験しています。その時、自分には離婚に関しての情報が全くありませんでした。病院を辞めて仙台へ来ました。そこで、女性の離婚に関する支援活動に入りまして、ようやく自分に起きたことがドメスティック・バイオレンスと知りました。さらに性暴力被害者支援に関わりました。セクハラ裁判や、性暴力の被害者に会ったことがたくさんあります。性暴力の教育が全く無かったことに愕然としました。結論として、家父長制や男尊女卑の価値観の中に私は育って来たことを実感しました。仙台で性教育の仕事に入り、その中で男女平等や人権尊重、性暴力の予防教育を伝えることの重要性を知り、そのことを伝えることに努力してきました。

**MY:** そっかー、今の八幡さんがあるのはそういう自分の体験もあるし、それからそこが入り口となって色んな活動をしてきたんだよね。

**EY:** うん。

**MY:** だよ、うん。女性の団体で活動してきたけど、仙台で離婚に関する支援活動を始めたっていうのは、丁度その時仙台でそういう活動があったの？それとも八幡さんが作り出したの？

**EY:** えっとですね、女性弁護士の方の呼びかけで、女性15人くらいで、女性のための離婚ホットラインという活動をしました。33年間まだ続けてるんですけど。

**MY:** すごいよねー。

**EY:** それまで、離婚に関するボランティア活動ってほとんど無かったんですね。

**MY:** 無かったの？

**EY:** 電話も、面接も溢れるように来ました。

**MY:** あ、そう。

EY: そう。だから個別面接もまるで何か野戦場の病院みたいに、もう衝立も何も無い状態で、次々電話も鳴り響いて止まらなくて。その頃、確か東京でニコニコ離婚講座っていう活動は聞いたんですよ。

MY: あ、そうだねー。

EY: ええ。だけど、それは男女共に対象としていました。で、私は、その女性弁護士さんが女性のための離婚ホットラインっていうことに入らない？って言われて、私も手探りでやってきて…、

MY: うーん。

EY: 母子家庭 9 年半した時に、実は色んなことがあったんですけど、どのように考えたらいいかわからなかったんですね。それで混ぜてもらって。

MY: うん。そっかー。

EY: 何もわからないまま進んできたんだなっていうことがよくわかりました。凄い反響でした。それからたくさん法律や公的な窓口ができましたけど、その年に 2 回の女性のための離婚ホットラインは、まだ続けていまして、コロナで一回だけ休みましたが、やはり必要だということ、一日だけに。そして朝から夕方までに絞って、また昨年からは始めています。やはり、色んな相談窓口ができましたけど、そこからまた紹介されて予約無しで来られるということで、あの多くの方がいらしています。それが原点で色んなことを学ぶことができました。それから、必要に迫られて話し合いの場を作り、シェルターを作り、気がついたら NPO の代表になっています。

MY: 気がついたら。

EY: はい。

MY: 33 年で凄いいね。ね。

EY: はい、ずっと続けてるんです。はい。

MY: でもさ、今話を聞いてると、やっぱりニーズがあるんだよね。

EY: はい。

**MY:** だから、何か始めると本当に「待ってました」って言って、そのニーズが押し寄せてくる。で、そのニーズを聞いてると、こういうプログラムも必要だなんて言って、どんどん新しいことを八幡さんやって来たじゃない。

**EY:** はい。

**MY:** それについて少し聞いていいですか、例えば、今シェルターを始めたって言われたけど、シェルター以外にも今活動しているハーティー仙台は色んな新しいプロジェクト作って来たじゃないですか。うん、どんなプロジェクトがあるのかな。

**EY:** はい。まず、弁護士相談、離婚ホットラインを始めたときにたくさんの方が弁護士に「何を聞いたらいいかわからない、自分はどうしたらいいかわからない」、そういう段階の人がいっぱいいたので、声を掛けましたら 50 人くらいきたんですよ。それで 10 人くらいずつ分かれて、スタッフが入って話し合いの場を始めました。それが続けてくださいって言われて、「深呼吸タイム」という活動をすぐ始めたんですね。

**MY:** そっかー

**EY:** それを月に 1 回。そして、だんだん 2 回、平日に来れる人、それから休日・土曜日だと来れる人、休日だと夫が[家に]いるから来れない人もいますね。これを私は一番力入れてます。そして、一番手応えを感じています。

**MY:** うーん。

**EY:** はい、で、その他にももちろん、シェルターも前は結構 4 室くらいの部屋の規模でやってたんですけど、DV 法が 2011 年にできてからは、私たち自身は専従の人件費もある訳ではないので、公的な所に入って頂くことを背中を押すという。そういうスタンスで、シェルターは 2 部屋に小さくしました。そして、あの力を入れたのは、やはり話し合いの場とか電話相談を増やすとか、それから、あと、離婚後の人たちの集まりの場とか、はい、その離婚...、シェルターに入って出た後が長いわけですよ。

**MY:** そうだよな。

**EY:** 調停、裁判、そしてそれが終わってから、また暮らしていく時の孤立もありますし。それで、その DV のサバイバーの人たちの集まりの場を開きました。

**MY:** うーん。

EY: それから、今度はその深呼吸タイムやサバイバーの集まりに来る人たちの子どもたちが、あの一、一緒に遊びましょと言ってもとてもパワーがあるので、無理だなと思って、震災後、グループリラっていう集まりの他に...

MY: そうだね、うんうん。

EY: リラキッズっていう小学生中心の集まりの場も開きました。それは今は終了していますが。

MY: うんうん。

EY: そして、3年前からは、そのDVの女性と一緒に出た思春期から青年期のね、子どもたちです。それが男性ということで非常に社会に出れなかったり、本当に家からこもっていたり、小学校から行ってなかった人とか、

MY: うんうん。

EY: そういう方がいたんですね。そしてハーティの活動だけでは男性の関わりがなかなか場を作るのは難しいので、もう少し他と連携して、男性のスタッフも入れて、ごぼうプロジェクトっていう...

MY: そうだ、ごぼうプロジェクト。

EY: はい、そして、まあ1年やってみて、どうなんだろうと思ってやったら、仙台は大学や専門学校や若い人たちの職場があるので割と広域から若い人が来ている、集まっている。その中でDV家庭の中で傷ついた若者。で、それが、もちろん精神疾患になっている方もいる、働けない方もいるけど、その他に大学や大学院、そして職場に入っていたのに、そのことを手当てするところが無い。精神科に行っている人もいるけど、やはり何か違うものを求めてた。NPOも虐待する親の相談、話し合いの場を中心に行っているNPOはあるけど、虐待の中で育った若者が、どうしたらいいんだろ、どこに繋がったらいいんだろってことを探して繋がってくる人たちがいて、まあ1年でやったことが3年目になってるんですけど、やはり一番最初の男性3人の氷山の一角でしたけど、やはり、たくさんいたんだなというのを実感しましたし、その3人も変化しました。ほんとにゆっくりだけど。

MY: うーん。

EY: うん、だから、やはり私自身が性教育の仕事で少年院の子どもたちや、養護施設の子もたち、たくさん会って教育してきました。今もしています。それから、中学生や高校生たくさん会います。講演にいて性教育で。大学生にも会います。その時に、やはり、大変な虐待環境の中、精神的・経済的、それから身体的もありますし、性的もある。その中で育ってきた人

たちが、医療とか、そういうことも必要だけど、なんでそういうことがあって、自分は価値があるってことに変換していくための支援。それがなかなか巡り会っていないってことに、そういうことに気が付きました。

だから、ごぼうプロジェクトも続けてます。かつ、今度はハーティ仙台で、電話だけじゃなくて、コロナになったことで、全国的に内閣府の費用で、SNS 相談？

**MY:** はい、はい。

**EY:** あれを体験しまして、オンラインで行うことの意味が大変わかりました。スキルも大変学ばせてもらったので、今年の 11 月からハーティ[仙台]でメール相談も始めました。そうしましたら、とにかく東北の人は少し入るけど、宮城県の中からメール相談が続いています。それで、まあ、ゆっくり返す。早くて 2 日以内、4 日位以内。

**MY:** うんうん。

**EY:** 5 日以内に返しますって言うてるけど、平均して 2～3 日で返してるんですけど。これが、夫と同居している人、仕事をしている人、それから子育て中の人、いつでも書き込めて、ゆっくり返事を貰って、そのテンポでも非常に必要としているってことを実感できました。

**MY:** そうだね。

**EY:** で、メール相談を続けています。そこに、若者たちですね、傷ついた若者たちの中で、女性の若い人たちですね。その人たちが回復するためには、やはり私たちと会う場を多くした方がいいと思ひまして。もちろんフェミニスト・カウンセリングに繋いだり、但しそれは有償なのでそうはいけません。性暴力の長期になった人は、男女共同参画財団の無償のカウンセリングにも繋がります。だけど、カウンセリングだけじゃなくて、私たちと一緒に活動することが有効かと思って、えーっと、今年度 6 月からは、そのごぼうプロジェクトで出会った 20 代、30 代の女性たちを今度は 10 月から始めるチャット相談の入力係に入ってもらうことになり、日々、自分の都合のよい時に来てもらって、勉強してもらってます。今準備中ですので、10 月になったらチャットの入力係をするということ。わずかですが有償でということを始めの予定。そのようなことに助成金申請をして取れましたので、少なくとも、来年度、2 年間は予算があるので、若い人たちが一緒にやることで、自分たちにも自信を持って欲しいなと思って、今その準備に必死です。はい。

**MY:** そうだね、10 月ってもうすぐだもんね。

**EY:** ええ。ほとんど今できたんで、カードとか入り口のホームページ整備を夜中まで IT の人と詰めています。

**MY:** そっか、やっぱり、話聞いてるとね、そのニーズがあるから、それを受け止めて新しいプロジェクト作ります。そうすると、ほんとにニーズがあるから、わーんと来るじゃない？ それに答えるために、また新しいプロジェクトをしたり、人を増やしたりとかして、どんどんどんどん忙しくなってきたるじゃない？ ね？

**EY:** そうなんですよ。

**MY:** 加速的に忙しくなってくる。で、もっとその話を聞きたいんだけど、その前に、仙台は 10 年前、2011 年 3 月 11 日、東日本大震災の被害を受けましたよね？ その時のことをお話頂きます？ どうでした？ その時？ どういう活動をしたのか、どういう状況だったのか。

**EY:** はい、私はそうですね、大震災が来る前に、まあ、仙台はそれなりに日本の中では、後を追いつながら、独自の方法をやってこれたな一くらいに思っていたんですけど、大震災が来まして、もう、宮城県の、こう 3 分の 1 くらいが流されてしまった様な思いです。沿岸部一体が街ごと流されて、多くの人が亡くなり、私の身内も何人も帰って来ない。その時に、なんか自分の力がとつてもちっぽけで、何をしたらいいかわからない気持ちになりました。だけど、なんて言うんですかね、世界中に「助けて」って言いたかったです。少なくともメールで日本中に「助けて」と発信し、吉浜さん通して世界中にもその言葉を発信したら、多くの人たちが押しかけて、送ってくれたり、お金や物を送ってくれたり、訪ねてきて一緒に回ってくれて、私は凄く感激しました。でも、その時に、私は、女性を支援する活動をしている。女性が女性を支援するためにこの様な物資が来たり、女性たちが来ている。もちろん、来る人たちが送る人にも男性の人もいらっしゃるんですけど、女性が女性を支援する活動をしているってだけで、被災地の女性たちがとても喜んで元気になるのを感じたので、入り口が女性ということがとても意味があるんだなと思いました。

**MY:** あの一、ハーティ仙台ね、今八幡さんが理事をしている NPO ハーティ仙台。地震のためにドアが壊れて、メンバーが閉じ込められたりとか、大変だったんだよね。

**EY:** はい。

**MY:** メンバー自身もみんな被災してるじゃない？ 八幡さんも家族を亡くしたし、それから、自分の家が壊れたメンバーもいっぱいいるけど、でも活動続けたよね。今振り返って、何が皆さんを突き動かしてたんだろう。

**EY:** そうですね。あの一、古いビルの中の相談室。まさに 24 時間の DV 相談、性暴力などの相談ホットラインにメンバーが出てたときでした。ドアが開かなくて、ビルが崩れるかと思いましたが、崩れませんでした。ドアを外から壊してもらって出たわけです。で、やはり、もう余震が頻繁に続いてたので、私は命の方が危ないと思って、相談はもちろん抜けまして、私たちは相談を休止しました。けども、やはり...



**MY:** すぐ再開したよね？

EY: ええ。再開しました。あのビルが...、余震は続いてたけど、ビルが倒壊しないという判定も出たし、やはり大変困ってる人たちがいっぱいいるだろうと思ったので、相談を再開しました。それから、男女共同参画財団でもたくさん相談してましたが、やはり災害のことでって、特別にまた電話を、相談窓口を増やしたんですね。だけど、みんなバスは間引きでしか来ないし、タクシーや自分たちのガソリンもままならない状態なんです。

**MY:** ガソリン無かったもんね。

EY: そうなんです。私も身内の被災地に行くのに1ヶ月かかりましたから、ガソリンがなくて。そういう時に本当にすぐに参加できるのは、歩いて行ったり、自転車で行ける、仙台中心部に行ける仲間だったので、財団のホットラインにもすぐ参加しました。ハーティも参加しました。

**MY:** それで、相談を再開して走り回りながら、今度物資を持って被災地沿岸部に走り回ったよね。それについても少しお話ください。

EY: はい、私は本当にいつもたくさん仕事してたんですね。教育分野の。その他の活動もなくなって家にいた時に、みんなと繋がって発信できることが SNS でしたね。それで、被災地の親族が生き残って避難所にいるなんていうことも、そのネットで知ることができました。で、行きたかったんですけど、バスに乗ってやっと走り出したから行こうと思ったけど、帰りに乗れるのかとか息子に言われて、そうだなあとか思って、ガソリンが入手できる4月始めから行きだしたんです。ラジオテレビで見ることと、その街全体が流されてしまった、道路が壊れている、走ってる車は自衛隊と警察の車だけ、全てを失った人たちがいる、という状態を目の当たりにして、通うしかなかったです。親友や奇跡的に助かった姪の所に避難所に通いました。そのうちにハーティのみんなも先導してくれたら行くよっていうので、自分たちのお金で食べ物を買ったり、いろんなものを持って行きました。

**MY:** うーん。

EY: そのうちに、そのことをインターネットで伝えたら、そのガソリン代にしてくれとか、物を送るから届けてくれ。女性が女性に届けるってことをしていると云ったら、是非あなたが渡したい人にあげてくれっと色々届きましたので、倉庫を借りて受け入れるようになり、全国から来た[人たち]、車、何台？ 4台も5台も連ねて、一緒に多くの被災地の所を回るようになりました。ですね、はい。

**MY:** そうだねー。何度かお邪魔しましたがね、倉庫に山のように積み上げられて、1日ばかりだよ。ね。

EY: はい。

MY: 道が悪いし、迂回したりとかして、以前、いつもより時間かかるし、色んなところを回って物資を届けて、みんなクタクタになって戻って来て。でも、さっきも「続けるしかなかった。行くしかなかった」って言われたけど、でも何がその活動を支えてんの？ どこにそんな力があるんでしょう？

EY: やっぱり私たちも、例えば半壊判定を受けたマンションにいる、自宅も壊れたところがある。けども、やはり現場に行けば、家族を失い家を失い仕事を失い何もなくなった、茫然としてる人たちがいるわけですね。そうすると、私たちは被災者ってそんなレベルじゃないなって思いましたので、何もできないなって無力感も感じたけど、やはり「支援に来ましたよ。少しですが」と言って、全国及び世界からの想いを言葉、それから来てくれたことを、それから物資で伝えることで、向こうの被災者の人も涙流して喜んでくれた。ということで、もう休日、仕事してたけど、休日はそこに行くってことを止められませんでした。

MY: 被災地に行けば、みんな大変だからって言うけど、自分も被災してんだよね。自分も被災地に住んで働いてんだよね。でも、やっぱりもっと大変な人がいるからって言って、やっぱり自分の大変さをなかなか話せなかったじゃん。ね。

EY: そうですね。それが吉浜さんが来て、フォトボイス。5月でしたよね、

MY: そうそう。そうだね。4月の20何日くらいに一度行って、その後話を始めて、そうだね。うん。

EY: その時、フォトボイス体験してみて、写真を写し、自分の思いを語るっていうことをした時、仲間たちがゆっくり話せて、そして福島にも通ってた仲間もいました。原発の避難の状態ね。思いを話すっていう時に、涙流して語ってくれた時は、自分たちも被災者っていうことで、やっとここで話せんだなって思いました。それで、でもやっぱ比較してみてね、あまりにもレベルの差が、悲惨さが凄まじかったので、やっぱり自分たちはできる限りのことをしたいとも思いましたね。

MY: そうだよね。つい比べちゃうけど、でもみんなそれぞれすごい大変な思いをして活動してきたじゃない？ で、フォトボイス始めて今八幡さん言われたように、涙がボローってね、流れてきて。「初めて泣けました。やっと話せました」って言う声を聞いたけど、大事だよね。もちろん大変な人がいるから自分を顧みずにね、頑張る。だけど自分も大変だってこと認めていいんだよっていうのを実践したよね。ね。

EY: そうですね。DV、性暴力と同じだと思うんですよ。みんな表に出て話すっていうこと、そのDV 性的な暴力、ドメスティック・バイオレンス自身がジェンダーに基づく暴力だと思う。そういうことを表に出て話すってなかなかできないですよ。

**MY:** できない。

**EY:** 皆反対にバッシングにあったり、実際攻撃が怖くって表に出れない人がほとんど。そういう時に代わりにアドボカシーで話す。証明してくるっていうことをずっとしてきたんですね。だから、被災者の人たちが辛い思い、家族みんなが亡くなった思いとかそういうことっていうのは被災者同士で語れない。そして、かつその中で女性であるっていう、また重ねての思い。そういうことも語れない。それを私たちがやっぱり足運んで聞いて伝える。そして、そのことをその場では言えなくても、入口を作って聞き取って、また発信する。そのことをしないといけないなと思いましたので、続けてたと思います。

**MY:** そっかー。あの一、震災後、女性への暴力っていうのは増えました？ 表面化した？

**EY:** えっとですね、まず、電話相談の臨時電話が置かれていたけども、3分で話せとか、そこは人が通るところであったりしながらね。

**MY:** 避難所ね。あーそっか、みんな携帯電話も流されちゃったとか、電気がないとか。

**EY:** そうです。だから、公的なところでホットラインがあり、そして、かけてくださいって言ったって避難所でかけられる状態ではなかったということです。それから、もちろん一緒に弁護士も行きまして、弁護士相談しますと言ったけども、女性支援であって、DV や性暴力の支援をしているという私たちが弁護士相談したら、「あの人は一体何を相談してるんだ、誰が自分の家族のことあの人は相談してるのか」ってわかるわけですよ。だからわからないようにしました。同じTシャツを着て、弁護士は女性同士が語り合っているというような風にして相談受けてました。でも、とにかくお互いの目があって半年体育館で暮らすわけですよ。半年以上ですよ。3～4日じゃないんですよ。はい。

**MY:** 雑魚寝だもんね。プライバシーないもんね。

**EY:** そうなの。そういう中で、だんだんに衝立とかできましたし、別室もできましたけど、だけど、非常にまたある意味では、表だったそのDV っていうのはかえってなかったわけですね。だけど個別的な、仮設住宅に行ったら薄い板一つであつてもとにかく個別の家に入るわけですから、これはもう物凄い[DV が]吹き出すだろうと思いましたね。だから、まず2～3ヶ月経って、少しずつ少しずつの仮設住宅に行った時に、DV 相談はやっと、いろんな入り口ができてたくさん受けることができました。

**MY:** そうだね。

**EY:** とにかく地元では人の目があるところでは言えない相談なんですね。ただし、仮設住宅だって、壁が薄いですからね。咳払いだって聞こえる。テレビの音も聞こえる。

**MY:** そうだね。

**EY:** だから、離れた空き地に行って、やっと入手した携帯でかけてくる。このようなこともあったです。

**MY:** そっか。あとやっぱり、災害後ってみんなほら、サバイバルモードじゃない？ だから、なんかこう自分の家族のこととか、自分のことは我慢するみたいなそういう風潮もあるし、その我慢を強いる世間のプレッシャーみたいなものもあるのかな？

**EY:** うーん。世間のプレッシャー…。避難、実際災害で会った人は、もっと身近に自分と同じ、及び、それ以上に家族を失ったり、大変な悲劇に遭った人がいるわけで、やはり言いにくいっていうのはあったと思います。その他に、やはり避難物資を渡しに行っても、代表が男性でその男性に渡すってことで、本当に皆に行き渡るんだろうとか疑問だったし、あの公的などこの避難物資は人数分公平にしなきゃいけないから、100、200 揃ってないと受け取らないとか、そういうことがありました。だから、やはり公平と言っても色々な物が世帯主に行くとか、それからリーダーが男性であるとか、そういうことで女性たちが本当に受け取ったり、自分が個人として支援されているっていうことを直に感じられているのかが、そこが弱いなあと思ったので、私たちは女性の相談であるし、入り口は女性に渡すということをあくまで続けたです。はい。

**MY:** そうだね。

**EY:** それから性暴力 DV に関しては、とても身近では言えないことなので、やはりその頃はメール相談なんてなかったから、電話で無料でフリーダイヤルで聞くというのは、たくさん増えていたし、そこを充実させていきました。

**MY:** そうだね。避難所のリーダーが男性だとかさ、なかなか相談しにくいっていうのは、災害前もそうだったけど、災害後って、その災害前の問題ってのがもっと膨れ出るみたいな、すごい大変さがあるじゃない？ で、東日本大震災は 2011 年、その後、このコロナ禍で女性への暴力、女性を取り巻く環境ってどういう変化がありましたか？

**EY:** 女性は大震災でも、コロナでも、元々貧困なのがもっと貧困になりました。それから、居住空間が狭いということで、非常にその男性自身も不安と貧困とストレスを抱え、今度は女性や子どもに向けて来ているということが起きて続けています。

**MY:** 社会的に弱い立場にある人に暴力がいく。

**EY:** その通りです。そこから、逃げる情報が、脱出していく方法があるということがなかなか伝わっていないですね。少なくともただし、震災の後もやっと 24 時間の相談っていうのが少

しずつ広がってきた。その他にコロナで、やはり東京でたくさん殺人事件が続きました。宮城県は毎年あって、殺人事件は一件もなかったのは 2019 年だけです。

**MY:** あーそう。

**EY:** はい。それで世界中がそのコロナ渦で、やはり弱者に暴力が向かっているっていうことで、対応が動いてますよってことを女性たちのシェルターネットのネットワークで政府に訴えたことで、やはり DV 相談+(プラス)という 24 時間電話相談が 4 回線で始まり、チャット相談が始まったことで、そのことを行政が各地の町、行政が広報をいっぱいしたし、マスコミもいっぱいしたので、「あ、言えることなんだ」っていう、相談できることだっっていうことが非常に浸透しましたので、たくさん相談がきました。今も来続けています。DV 相談+(プラス)は 1 年で終わる予定でしたが、溢れるように来るので、やはりまた続けています。電話もチャット相談も。

**MY:** うーん。

**EY:** 元々震災で、寄り添いホットラインっていうのがきっかけで始まりました。それも続けてましたけど...

**MY:** きっかけだよね。

**EY:** 一般ライン、男性もいっぱいかけてくる、女性もですがね。一般ラインや、セクシャル・マイノリティ、外国人ライン、そして DV 女性ライン、自殺まで考える人と、いろんな入り口がある中で、やはりその女性ラインが少し混んでもいますし、埋没してしまうのはある訳ですね。だけど DV 相談っていう名前で全国が行政マスコミが広報しましたから、「あ、相談していいんだ」って気づいた人、今まで相談することピンとこなかった人たち？ はい。あの、老齢期の人たちとかね。

**MY:** うん。

**EY:** 自分たちの問題とか、それから老齢期の人が娘や孫のことを心配しているとか、それから相談に公的な相談にかけるよりは、裏社会ですね。それ自身も性暴力ですけど、風俗・売春。そのような世界でチャット相談とか、そういう。チャット相談っていても、チャットルームはアダルトなんですけど、そういうところに吸い取られていた人たちが、そこがもうコロナで収入が途絶えたので、「もうどうしようもない。死ぬしかない」と思った時に、やはり彼女たちにもそういう相談がありますよって情報が届いて、かけてきているということがわかりました。

**MY:** あの質問が前後しちゃうけど、これ、最初に聞くべきだったんですけど、今の肩書きというか、今のお仕事について教えてください。

EY: この DV や性暴力に関しては、NPO 法人ハーティ仙台の代表理事をしています。

MY: 何年務めてます？ もう何十年？

EY: NPO 法人にしたのは、実は大震災があった 2011 年なんです。

MY: あ、そうなんだ。

EY: その前に、長い間ずっとそのハーティ仙台っていう名前で活動してるんですが、NPO 法人に届けるってことはですね、住所を出すんですよ。

MY: そうなんだよ。日本の制度は。ね、自宅住所を。

EY: 公開しなきゃいけないんですよ。名前どころじゃないんですよ。そして公文書公開で、3 人理事、副代表まで含めて出さなきゃいけない。今は代表の私だけですけど、それから顧問の医者や弁護士の住所も出さなきゃいけない、っていうスタートだったんです。だから、仙台市と連携して、ずっとその 33 年前からやってたんですが、NPO 法人にするメリットを感じなかったんです。

MY: うん、うん。

EY: けども、2011 年震災の年ですけど、前年度に全国シンポジウム、DV についての全国シンポジウムを仙台でするって決めたんですね。そうすると、その公的な県とか、そういうところの助成金をお願いしなきゃいけない。まあもちろん、協賛であるというような名義もいただくのに、やはり審査する人たちかが、NPO 法人っていうのがついていることがやはり大きなポイントになると聞いたので、やはり、しょうがない NPO 法人にするかと言って、2011 年に NPO 法人にしたんですよ。それで、私の住所で法人登録しました。そのままです。今は 1 名だけです。

MY: あ、そうか。

EY: そして一度、弁護士や産婦人科の先生の顧問は無しにしました。その後 NPO 法人のこと、条例が少し変わりましたので、また医師や弁護士を顧問って載せるようにしました。顧問料なんて払ってませんよ。寄付と会費を貰うだけですけど、私も別に給料貰ってる訳ではないですよ。

MY: そうだよな。

**EY:** 他の仕事してます。だけど、やっぱり NPO 法人って出した方がマスコミの方も納得してくれるんだっていうのがわかりました。それで私の住所でしているから、はい、私の所に訪ねてくる人もいます。だけど、ここは私の自宅ですって返してます。はい。何を話してたんだろ。

**MY:** えっと、じゃあね、今の活動 NPO 法人の代表理事の他に色んなことやってるじゃないですか。

**EY:** そうなんですよ。

**MY:** 八幡さんの出発点は助産師？

**EY:** そうなんですよ。病院勤務辞めて、仙台で個別の相談室をちょっと開きましたが、2~3年やって、母乳育児なんていうのは、とにかく科学的な説明をして励ますことで、できるんだなって思って、それで辞めようか、病院に戻ろうかと思ったんですが、性教育を行いまして、思春期の性の相談員をしたことをきっかけに性教育をドンドンするようになりまして、それがなかなか面白いなと思って、このまましばらくフリーでいようと。そうしますと、どんどん看護学校や助産師学校の講義、そして養護施設や少年院の講義をすることができてきました。

そして、NPO 法人の DV や性暴力の活動をしていて、やはり性教育の中に性暴力のことをきちんと伝える、予防からできるだけ小さいうちから伝えることが大事だと思ったので、自分の活動と仕事の中がリンクしていて、たくさん子どもたち、若者に伝えることが大事だなと思いました。それで、気が付くと、男女共同参画財団の理事もしてます。それから仙台の都市は東京と違って百万都市とはいえ小さいです。だから、それぞれの NPO、薬物中毒やチャイルド・ラインや、それから児童虐待防止の NPO や、それぞれたくさん NPO が皆知っている仲です。お互いにまた支えあっています。そういうことなので、他の活動の、例えば、セクシャル・マイノリティの人権活動やエイズの相談や支援活動などにも入っています。

**MY:** 八幡さんにとって、八幡さんがライフワークとしてることって何でしょう。

**EY:** ライフワークは、私はこのまま、女性や子どもたちの人権が尊重されなければいけないとか、それから、男女平等が行き渡らなきゃいけないとか、こういうようなことを次世代にどうやって伝えていくかということが、もうずっとやり続けることかなと思っています。

**MY:** うん、うん。そうだよ。女性の人権、男女平等ね、性暴力防止。さっきいろんなことがリンクしたっていう言葉使われたけど…、

**EY:** はい。

**MY:** 自分の経験とか、それから、これまでの活動、色んなことやってるけど、なんか根底にあるのは絶対、人権。女性が女性から女性へのサポートで。あと一對一のサポートもするけど、社会を変えていかなきゃいけないっていう、そういうところもあるのかな、八幡さんの活動には。

**EY:** そうですね。うーんっとですね、やはり、仙台で DV や性暴力にたくさんの仲間と取り組んできて、じゃあ、全国シェルターネットというのがすぐあるということで、東北でシェルターしてるとこも、その時なかったの、すぐ東北代表になって、

**MY:** うん。

**EY:** 理事に入らないと言われて。「えっ」とか思ったけど、専従でもないしとか思ったけど、繋がることで全国の動き、そして自分たちの先行っている女性たちの動き、それを学ぶことができました。そして、その人たちを通して、世界の女性の人権、男女平等について動いている動きも知ることができました。そして、そのネットワークで被害者・当事者の声を届ける。そして、それをまとめてまた発信するということが法律ができたり改定されるっていうことも実感できました。

**MY:** うん、うん。

**EY:** だから、私が目の前で細々と一人をずーっと支援していく。それが、ものすごい人数ではないけども、そのことがはっきりとその長い経過を見て自信をもって言える。「こういう支援があると人の人生が変わる。その子どもたちの人生も変わる」。このようなことを NPO は発信していけるし、その実際のことをちゃんとアドボカシーで伝えることで、また施策が変わっていく。そうすると、また窓口の予算も変わるし、被災支援の福祉も変わっていくってことを実感しました。

**MY:** そうだね。少しずつ変わってきてるよね。

**EY:** はい

**MY:** もちろん色んな問題、制度の問題あるけども、法律ができたり新しいプログラムができた、予算がついたり。政府がかんで、女性の暴力のホットライン、トレーニングもやったし、もう 20 年前、10 年前考えられなかった。10 年前に初めてか。震災の後にね、内閣府が乗り出してきたし、少しずつ変わってきてるよね。でも、その裏には毎日のたゆみない、それこそ血の滲むような、汗が流れでるような努力がある。でも、少しずつ変わってきてる。だから、なんか続けてるのかな？そして私たちはもうだいぶね、歳もとってきたし、これから次の世代に続けてくって、すごく大事じゃない？

**EY:** そうですね。まあ、あの一、血や汗が流れるって言うけど、でも楽しいです。



**MY:** 楽しい。

**EY:** 楽しい。だいたい代表が楽しい、面白いと思っていないと人はついてきません。私が一番これは面白い。人の悲劇に対応してるんだけど、楽しい。なぜそうかって言うと、人が変わっていくわけですね。その出会いで、その人の人生が変わっていく、そして表情が明るくなっていく。そして、大変だったけどよかったってなっていく。10年20年30年付き合うって、これはもうNPOしかできないでしょうと。

**MY:** そうだね。

**EY:** うん、そこなんですよね。そうすると、もう長い経過見てるので、確信的になっていくわけですね。この支援は価値がある。

**MY:** うん、うん。

**EY:** そのことが言えるってことは、私たちが言わなかったら誰が言うんだ。これを自分が宮城県で話すだけでなくシェルターネットというところで、声明文出すどころか、例えば国会の中の広いところに各省の人たちを呼んで、全国から200人くらいが女性たちが行って、そこでそこにたくさんの当事者が入って....

**MY:** うーん。

**EY:** 決して顔は出さないけど、自分の問題として語る場も作って、それを厚労省も内閣府も総務省も文科省も警視[察]庁もみんな聞くってすごいことだなんていうのを東京の集まりに行ってみて、私はやっと... 本当に選挙するだけじゃなくって、こういう風に直接人が訴えることで、各議員の人たちが心動かされて、やはり条例が変わるとかそういうことってあるんだって、学ばせて頂きました。

**MY:** いやー。

**EY:** でも、それはものすごい立派な文が私は作れなくても、目の前で何十年と見た人たち。小学生の時来た人が大人になって結婚して行く。気が付くと、もう頭真っ白、髪の毛真っ白でヨレヨレになってた人が老齢期なのに若返って、うちの講座の講師をしてたり、相談員やってたりしている。若い人たちが本当に少しずつ関わることで、私もそういうことに関わりたいて勉強しますってきてるわけですね。そういうのを見ますとね、やはり繋がって行動するってことは、世の中が少しずつ変わるんだって思ったら、いや面白いですよ。楽しいですよ。

**MY:** やめらんないね。

EY: うん。絶対、面白くて楽しくなかったら、どうして自分の生計を支えたりする仕事以外にどうしてできましょう。

MY: ほんとだ。

EY: 確信できる情報を、例えば全国の人たち、それから世界の人たちから聞くと、まだまだやれることはあるんだなって思って。仙台で新しいことやって来ましたって言うけど、それもやっぱり全国のみんなの話を聞き、世界の人たちの話を聞いて先行く人たちの話を聞いて、やっぱり必要だと思ってたのは、やっぱりやった方がいいよなど、そのように背中を押されてやってみました。

MY: このインタビューは、グローバル・フェミニズムズ・プロジェクトの一環じゃない？

EY: はい。

MY: で、ちょっと、フェミニズムってなんぞやとかさ、フェミニズムと八幡さんたちがやる活動って、どう繋がってんのやーみたいな質問、ちょっとするね。

EY: はい。

MY: 八幡さんにとって、フェミニズムってどういうこと？

EY: 私は病院で働いてる時に、何にもわかりませんでした。

MY: うん。

EY: で、仙台来てフリーランスになった時に、いろんな人が向こうから何か話しかけてきてくれたんです。そん中の、あの女医さんですけど、東北で一番最初にフェミニスト・カウンセラーになった方です。そして性教育のことで出会ったんですね。それで、ハーティ仙台のスタートから一緒にやったし、仙台市のDVの調査も一緒にやりました。未だに仲間です。その方に私、フェミニズムって何ですかって聞きましたよ。

MY: うん。

EY: はい。そういう教育、何も女性の人権とか男女平等の教育とか何にも受けてないですよ。

MY: なかったもんね。

EY: なかったです。私、病院で、産科・小児科・助産師やってたのに、女性の支援者だって意識どこまであったんだろうって。で、何ですかって聞いたら、「あ、八幡さん、男女平等って

ことですよ」って言われて、もう私、その言葉を聞いた時ストーンと落ちましたね。あ、そういうことか。平等じゃなかったんだ。なるほど。シンプルなことなんだなって。

**MY:** そうだね。あのフェミニズムとか言うとなんか固いけどさ、すごい基本的なことなんだよね。

**EY:** そうです。で、チャイルド・ラインにも入って、あ、子どもの人権って大事なんだっていうこと。そのいろんな NPO が子どもの立場から。私たち NPO 活動としては女性の立場から。薬物中毒ダルクやその依存症の NPO の人は、そこで追い込まれた病的な、及び弱者の、その人の大変さに寄り添って、そこから発信する。

**MY:** うん。

**EY:** それぞれの立場で支援していく。でも全部つながっている。でも、根源に女性が一番人数が多くて、そして自分が差別されてることも気が付いてないの。子どももですけどね。

**MY:** うん。

**MY:** Mhm.

**EY:** はい。そのことが大きいんだな。そして、子どものそばで次世代が育っていく。だから、将来を変えていくのに、やはり女性支援っていうのがとても大事だし、簡単に言えば、男女平等。人は平等。これが実現されてないことは、それぞれ男性にとっても、次世代の人にとっても、とても不幸なんだということが簡単に男女平等って言葉でストーンと落ちました。

**MY:** そうだね。これは絶対実現したいよね。そのためにも駆けずり回ってんでしょ。八幡さんはいろんな。

**EY:** そうですね。あの一、なんかそこはかなり進んだ形ってどこにあるんだろうって思うと、どうしてもスウェーデンとか、ノルウェーとか、フィンランドとかそちらの情報が入ってくると、とても惹かれました。やはり震災後の支援として仙台はノルウェーとの友好関係がありましたので、何年にも渡って、ノルウェーに行って、いろんなことを学んでくる、交流してくるっていうのがあったので、3回目は私も行きました。

**MY:** うん。

**EY:** で、やはり若い人たちが、とにかく生き生きとして、男性も女性も自分のあるがままですよ。のびのびと生きている人たちっていうのを目の前にして、「やっぱりできるんだな」って思いました。だから、よりスウェーデンやノルウェーのことを学んで、ノルウェーで目の前にして、なんかブランドの服を着たり、ダイエットしてすごく可愛くしなきゃいけないとか、そういうことが全くなく、私の実力で評価されますからって思っている女性たち。そして、一

緒に仕事するのは楽しいですよって言うてる男性たち。もちろんその国だっていろんな問題はありますけどもね。でも、まず、若い人が生き生きして活躍してる国って見て、次世代に希望を持つ方法はあるんだっていうのは実感できたので、余計落ち込まなくなりました。

**MY:** そっかー。今、北欧諸国と繋がって色んなことを学んだって話が出てきたけど、その北欧諸国の取り組み、女性への暴力とか人権問題の取り組みと、日本の例えば八幡さんたちの活動の共通点とか、それから違うところ、相違点、どんなところなんだろう？

**EY:** うーん。私たちが目指していることは同じだと思うんですけど、違うところは、やはり施策に活かされてない。この学んだところ、そしてそうやって行きたいっていうところ。それはやっぱり選挙でそれが大事だと思う人たちが増えなきゃいけない。だけど、その若い人たちがそのことをちゃんと情報をもらって投票し、自分たちの代表を選ぶっていうことができる気が付いてない。

**MY:** そうねー。

**EY:** その話を私、結構性教育やいろんなことで全国に震災前は行ってたんですけど、あ、震災ってコロナ前。そうすると、性教育、性暴力の話する他に、二次会で話をするわけですよ。スウェーデンやノルウェーも40年50年前は同じだったんだよ。そして、若い人がこうやって変わっていているんだよ。元気になるんだよ。そういう話、全然聞いたことないって言うんですよ、若い人たち。

**MY:** うーん。

**EY:** そうだよって、そういう教育、何にも学校でされてないし。じゃあ私も「人権って大事なんだよ、男女平等なんだよ。そして、そういうことは実現できるんだよ。若い人たちが希望を持って自分たちの思いを、代表を選んでいいんだよ」みたいなこと性教育の中に入れていくわけですよ。そうすると、若者の目が変わるんですよ。通じるって確信できますよ。300人いようと、600人いようと、700人いようと。だから、子どもたちへの教育が大事なんだなって、とても思いました。大学に行った人たちが、私たちは大学に来てこれだけのことを学んだ。例えばリプロダクティブ・ヘルス・アンド・ライツのことです。だけど、来なかった人はどこで学んだって。これ知らないで大人になっていたこと、恐ろしいって。感想書きますよ。だけど、やはりコロナになって私立大学は大変になった。いろんな意味で経済的にもね。そういう時にジェンダー論が消えてしまう。

**MY:** あ、そうー。

**EY:** でも続けなくちゃと思っている人いるから、またコロナ落ち着いたら復活するんじゃないかと思うんですけどね。も、そこに来なかった人、どこで学んでしょって書いてきますよ。

**MY:** そうだね。

**EY:** うん、そうだなって。本当に小さい時からの教育に入らなきゃいけないけど、現場の先生たちも、そういうこと学んでないし、気がついたとしても自由に教えられない。それはやっぱり戻ってみれば、卵が先か鶏が先かだな。その大きな方針が変わらないといけないし、そのことは予算がつかないといけないので、やはり地道に若い人たちに伝えていくことが大事ななって思っています。

**MY:** そうだね。このフェミニズム・プロジェクトはね、大学におけるプロジェクトなのね。たぶん今日の八幡さんのインタビューを観る人、聴く人の多くは研究者、大学で教えている教育者だったり、現場を持ってない人も多分多いと思うのね。研究者とその活動家の連携っていかさ、どういうこと、何が必要なんだろう。

**EY:** はい。研究者の人たちのインタビューも何回も受けました。そういうヒアリングとマスコミの人の取材はずっと丁寧に対応してきました。いらないって程資料も渡します。で、やはり世の中の人には現場の人の声も聞くけども、やはりちゃんと統計をわかりやすく整理して、公正な目で色んなところのデータをちゃんと集めて、論理的に説明する研究者の人の話は信頼しますよ。だから、その人たちが発信して行くことは、とっても大事だと思ってます。私はテレビでコメントをするなんていう時に、なるべく顔を出したくないんです。だから当事者を顔隠して出してもらうことと、仲間の大学教授に出してもらいます。それも男性に出してもらいます。30年以上の仲間の。その方がやっぱり世の中聞くんですよ。

**MY:** そうだね。

**EY:** 彼はもちろんフェミニストで女性問題・男性問題、両方とてもわかってる人です。でも、あえてその人が研究者である、社会学者である。そして男性問題に詳しい。そして、教授であって男性があるってことで話してもらおうと、私は余計インパクトがあるし、人は聞くとと思うので、男女関わらず論理的に統計を出し、研究を発信し身近で大学生にそのようなことをきちんと伝える人、とても大事だと思います。

**MY:** 日本の今の状況大変だけど、日本でもそのフェミニズム、男女平等の動きね。運動？ 少しずつ発展してるじゃない。何、どういう期待をしますか。日本の将来、こういう風になってほしいっていう。

**EY:** 若い人たちが希望を持って立候補し、選挙に真剣に考えて自分たちの意見をちゃんと投票する国。そうなりたいです。

**MY:** そうなりたいね。で、さっき八幡さんが言ったように若い人たちがこう希望を持って、輝いて自分らしく生きていく、いける、そういう社会作りたいよね。

EY: そうです。先進国の中で1番憂鬱で自分に自信がなくて、そして社会は変えられないと、ほぼ諦めているパーセンテージが高いのは日本なんです。内閣府のホームページに出ています。なんか絶望して従うしかない。諦めるしかないっていう教育されてるからダメなんだって思います。教育大事です。

**MY: 大事。**

EY: そうです。ものすごい長い時間じゃなくても、若者、子どもたちに伝えたら、伝わるって、この33年間確信的に思ってます。

**MY: そうだ。**

EY: 工夫して伝えたら伝わります。だから、あまり絶望感はないです。

**MY: 八幡さんにとって...。どういう言葉で聞いたらいいのかな。全てが八幡さんの一番の業績なんだけど、自分の活動の中で最も大きな業績、何ですかって言われたら、どう言いますか。全部大きな業績だけど、八幡さんにとって。**

EY: 私は、ハーティ仙台の活動を続けているってこと。とにかく代表者を背負うって言ったら、ちょっとなんか自分褒めてるみたいですけど、女の人たちって、すごくやりたいと思ってるけど、トップ切って名前だしたりスタートしたり、代表するとか、そういうことのトレーニング受けてないの。で、それをまず私やるからって言って。最後の責任とるよ。もちろん覚悟持ってるわけですよ。そこのところをやり続けていることが自分にとって、自分を褒めたいです。はい。

それで、それをみんなもできるんだよって思って。但し同年代の人に代表何回も「代わんない？」って。私69ですよ。「代わんない？」って言っても、「はい」となかなかみんな言わない。でも、それは無理なんだなって思うことも多いんです。でも、次世代の若い人たちは、その中から育ててほしいなって思っているし、大学出た人たちで興味持ってアクセスしてきている方たちがいるので、色んな仕事するかもしれないけど、そういう人たちにも給料が入って、そういうことに就くのはかっこいいんだって言うね。そういう世の中になりたいなと思っています。

**MY: そっかー。**

EY: それから、やはりなぜこの活動してきたかって[言うと]、子どもや若者に人権がある。そして、それを尊重することはお互いに大事だということ。そして、その実際に目の前に出会った縁があって繋がることのできた女性や子どもの被害者支援をいろんな人とネットワークして

続けてきた。そして今も続けてるってこと。これが自分にとってよくやったなって今もよくや  
ってるねと言いたいことです。

**MY:** [よく]やってる。いいことだな。だから、人が一緒に...「ついてくる」って言い方じゃな  
いんだよね、ハーティは。一緒にやるんだよね。八幡さんが代表だけど、八幡さん、もちろん  
こうやって引っ張るよ。でも、なんかハーティ仙台って繋がりがすごいじゃん。その共同体っ  
て言うかさ、あんまり上下関係なくて、八幡さん代表だけど、ホットラインのさー、夜中のシ  
フトもやるし、ね。ある意味で平等っていうのを、すごく実践してる団体だと思うのね。

**EY:** そうなんです。反対したり、慎重に考えようって、必ず反対意見を述べてくれる仲間もい  
ます。でも、その方と話し合っているうちに、みんな、より納得するんです。そして、その方  
はもう主力となってやってくんです。それから、私が得意でないところですね。ほんとに日常  
的に手工芸やいろんなことやっていると、そういうことが得意な人もいるし、老齢期の人のケ  
アが得意な人もいるし、子どもたちの託児が得意な人もいる。でも、それが、「私はこれがで  
きるよ、私はこれができる」ってことが、みんな生き生きとやるのはとてもいいことだなあ  
と思っているし、

もう一つは 24 時間[ホットラインのシフト]にも入ってるって...。私ね、現場に入っていないと駄  
目ですね。あの、少しずつでも入っていないと、そこ私の名前を受けてやってますよねって  
時に、どんな傾向でどんなシステムで何をを目指しているのかわからないと、私は代  
表やられてはいけません。これはやっぱり医療現場にいたからだと思います。現場で動けな  
いってことは、やはり一緒に汗を流さない人には人はずいてこないと思っているので、それは大学の  
研究者の汗の流し方と違うし、それは全部やっぱり研究してる人も汗流してるんだと思いま  
したので、一緒に遊んだり、一緒に料理したり、一緒に食べたり...

**MY:** あと、一緒に踊ったり？

**EY:** 踊ったりしますよ。でも、なんか自分が面白いと思ったこと、みんなも面白いって思うん  
だなっていうのがあるので。ただ自分の中では繋がってるんです。なぜその踊りなのかとか。  
なぜ動かすかとか。今一緒に森田ゆりさんのヒーリング・ヨガ。老齢期の人とやったり、若い  
人とやったり、小学生とやったり、養護施設の子どもたちや、少年院の子たちとやったりして  
...。それはやっぱり一緒にやるとか、とても大事だし、毎日一緒にできないけども、何かの代  
表をするっていうのは、汗を流さない人には人はずいてこない。

**MY:** ホントだね。

**EY:** 水面下の活動の下準備とか、そういうことをちゃんとやらない限りは人は信頼してくれな  
いし、それができなくなったら、代表は本当に代わってもらおうと思っています。ただこの形  
が名前が続かなきゃいけないってことでもない。同じ活動がもっとできて、別の名前でも  
やりたい人がいたら、それもいいと思います。ただ、ある程度、行政や他機関との連携ができて

ところの方が、そして予算が持ってこれる形になってた方が、次世代の人は少し楽だよなって思うので、もうちょっとやろうかなと思っています。

**MY:** もうちょっとと言わず続けてください。またいろんな形でね、一緒に仕事をしていきたいし、またいろんな話をお聞きしたいと思います。今日はね。1時間以上に渡り、八幡さんの始まりから今の仕事。そして、どういう視点で、どういうことを目指して活動してきたかってことを聞いてきたんですけど、1時間じゃ足りないよね。八幡さんの仕事についてね。これだけは伝えたいっていうことあったら、話してください。

**EY:** 男女平等とか人権尊重した方が、みんな楽しく生きれるんです。それができるだけ伝わることだと思います。世界中に。

**MY:** 世界中に。

**EY:** はい。もうそれしかないと思ってます。

**MY:** 男女平等だから、これ女性だけの問題じゃないんだよね。

**EY:** はい、男性も楽になるんです。

**MY:** そうだね。若い人もお年寄りの方もみんな楽になる、みんな元気になれる。

**EY:** はい、世界中が100%急にそうなることはないけども、方法はあるし、道筋はあると思っています。わかる人たちはいっぱいいると思います。伝えれば。

**MY:** 伝えればね。そして、ちっちゃい変化でも、それを実感したり見たりすれば、「あ、変わるんじゃない」。

**EY:** そうです。

**MY:** うん、うん。今日はすごく意義のある話をありがとうございました。またこんな形で全国の世界中の若い人、それから若くない人も含め、八幡さんが現場で汗を流して培ってきた知識とかね、経験をこれからも私たちにシェアしてください。これからもよろしくお願いします。

**EY:** はい、聞いて頂いてありがとうございました。

**MY:** どうもありがとうございました。